

前回に引き続き私事で恐縮だが、父のこ
とについて語りた。私の父は太平洋戦争
で負傷し帰還した傷い軍人であった。召集
令状によって応召した名もない一兵卒であ
る。シンガポールを起点として東南アジア
を転戦し、ビルマ（現ミャンマー）で閩近
に被弾。右眼球を摘出するという重傷を負
った。昭和十九年、父が二十五歳の時であ
る。

戦後、父は出征前に勤めていた大牟田市
の企業に再び勤務した。戦前に担当した経
理業務に従事したが、後に守衛となった。
事務作業で残りの目の視力が低下し、失明
しかかったからである。昭和二十四年に母
と結婚し、その後兄と私生まれ四人家族
となった。当時、父の収入のほかに経済的
支えとなったのは、傷い軍人の父に支給さ
れる恩給だった。これは片目を失った代償

父の目

AMDA 近藤 祐次
事務局長

一 日 一 題

であり、父の残りの人生の精神的支えにな
っていた。私もそのおかげで大学に進学す
ることができた。いわば父の目を代償とし
て高等教育を受けることができたと思
っている。

大学卒業以来、私は一貫して海外業務に
携わり、特に最近十年間は国際協力の仕事
で諸外国を訪問することになった。シンガ
ポール、フィリピン、インドネシア、マレ
ーシア。兵士として父が見た戦場を、息子
の私が国際協力のために訪問するという巡
り合わせに父と私の運命的つながりを感じ
た。父は平和になったかつての戦場を再び
自らの目で見ることなく平成五年に七十四
歳で人生を閉じた。戦争で失われた「父の
目」に代わって世界のすべての人々の平和
な笑顔を見たいと思う。そしてAMDAは
それができるところだと私は信じている。